

## サンタクロースという親(おや)性 : 比較論的考察

荒木, 正見  
福岡女学院大学人文学部 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/1812240>

---

出版情報 : 比較思想論輯 : 比較思想学会福岡支部紀要. 1, pp.25-34, 2000-03-31. 比較思想学会福岡支部  
バージョン :  
権利関係 :

# サンタクロースという親（おや）性 -比較論的考察-

荒木正見

## 序

小論では、サンタクロースの本質的な意味について考察する。考察の方法は、社会的な現象としてのサンタクロースに関するテキストを手がかりにして、そこから哲学的なテーマ、すなわち、認識論や、存在論を考慮しつつ、サンタクロースの実在性を論じ、さらに歴史的な考察を加えてサンタクロースの本質を解説する。そして、その本質が、親という性質を意味するものだけということ心理学を手がかりにして論じる。小論はそのように、学問領域を比較しつつ論じる試みでもある。

まず考えるてがかりにするのは、中村妙子訳『サンタクロースっているんでしょうか？ -子どもの質問にこたえて-』（偕成社、1977/1986）と、村上ゆみ子著『サンタの友だちバージニア -「サンタはいるの？」と新聞社に投書した少女-』（偕成社、1994）である。

前者は子供向けの小さな書物でありながら、わが国でも20年を超えるロングセラーになっている。「あとがき」によれば、「サンタクロースっているんでしょうか？」は、1897年9月21日にニューヨーク・サン新聞にのった社説で、その後、アメリカでは、クリスマス時期になると必ず新聞や雑誌に取り上げられているほどの古典になっているとされる。

社説を書いたのは、フランシス=P=チャーチ（1839-1906）で、それは当時8歳の少女バージニア・オハンロンの投書「サンタクロースっているんでしょうか？（Is There a Santa Claus?）」に対する返事であった。後者の『サンタの友だちバージニア』は、この投書した少女の子供向けの伝記である。また、後者の124-125ページには、社説の原語英文が掲載されている。

さて、この社説が100年以上にもわたって親しまれてきたのにはそれなりの理由がある筈である。それは、サンタクロースの本質を的確に言い当てているからにほかならないであろう。そこで小論では、このテキストを解説しつつサンタクロースの本質を探ることにする。結論を先回りして述べるならば、そこには、ひとつの親らしい性質、親性が示されているはずである。

なお、前者からの引用は、当の書物にページが記されていないため、引用ページを記すことができないが、引用については「」で表現している。

## 1 19世紀末の危機意識

少女の質問は簡単である。「友だちに、『サンタクロースなんていないんだ。』っている子がいます。（中略）おしえてください。サンタクロースって、ほんとうに、いるんでしょうか？」というものである。しかし、それを受け取った60歳を目前にしたベテラン記者は、そこに重要な時代の変化に対するメッセージを読みとった。それは、人間の魂の危機とでもいべきものに対する警鐘と受け取ったのである。

まずは、19世紀末のその危機意識をテキストに沿って読み解くが、すでに20世紀末に生き21世紀を迎える我々にとっては、この危機意識がすでに現実のものになったことをも自

覚しければならない。

記者は明快に答える。「サンタクロースなんていないんだという、あなたのお友だちは、まちがっています。」と。

その理由としてまず述べられるのは、そのお友だちは、なんでも疑ってかかる「うたぐりや根性 (scepticism)」がしみこんでいることである。この「うたぐりや根性」について記者は、「目にみえるものしか信じない」「心がせまい」「じぶんのわからないものはみんなうそだときめている」としている。これは我々の認識の宿命を述べている。

ここで述べられることは、認識論の基本に示されるように、我々の認識は本来、限界があるということである。限られた認識能力であるにも関わらず、自分で認識し自分で思ったことだけが正しいと信じてしまい、勘違い、見誤り、その他多くの誤った認識に振り回されているといっても過言ではない。その典型的な例として「幻影肢」の現象が挙げられる。事故や手術で片足を失ったとして、その後数カ月は、物質的にはすでに無いはずの足先の感触が残る現象を幻影肢と呼ぶが、これなどは、物質的な感触がいかにあやふやなものであるかをよく表している。

我々の認識はこのようにあやふやなのだから、本当のことを知るには「世の中のことすべてをりかいし、すべてをすることのできるような、大きな、ふかいちえがひつよう」だと述べられることになる。これは、人間を越えた絶対的な存在、神の智慧である。

ところでさらに、この記者にとってあやふやなものは、感覚的な対象、すなわち物質だとしていることに注目しなければならない。それは、うたぐりや根性が「いまはやりの」とされていることとも関連する。この「いまはやりの」は原語ではもっとはっきりと“of a skeptical age”、つまり、懐疑的な時代とされている。

では、この19世紀末というのは、歴史的に見れば、どのような時代だったのか。

この1897年において、国際的に最も顕著な事件は、クレタ島の領有をめぐるギリシアとトルコが戦争を始めたことである。クレタ島民が革命を起こしギリシアとの合併を宣言したことに端を発したこの事件は、結局12月になって、クレタ島をイギリス、フランス、ロシア、イタリアが共同保護管理し、トルコの宗主権のもとでの自治領という決着をみる。

またこの年、アメリカでは第25代大統領マッキンリーが就任する。彼は翌1898年のキューバの反乱を機に、カリブ海や太平洋一帯を支配していたスペインとの戦争に入り、プエルトリコや、フィリピン、グアムなどを獲得し、さらにはハワイを併合し、1901年にはキューバを保護国にする。しかし、その1901年、マッキンリーは暗殺されることになる。

この1897年の事件が意味しているのは、列強による植民地拡大の動きである。この年にはすでにその動きが日常の出来事になり、列強が絡む植民地獲得のための国際紛争があたりまえになっているといつてよい。わが国が初めて行った近代的な国際戦争である1894年の日清戦争と、その連鎖で行った1904年の日露戦争が、ちょうどこの1897年を挟んでいるのも象徴的である。

柴田三千雄・木谷勤『世界現代史』(山川出版社、1985/1995)によると、現代は15-6世紀から徐々に形成されてきた資本主義的世界体制のひとつの段階であるとされるが、その特徴は「ヨーロッパ人の一方的な主導のもとに一体化がすすめられたこと、一体化の紐帯は資本であること、主導地域では国民国家への政治的結集がはじまること、そして、この一体的な世界は中心・半周縁・周縁といった支配・隷属関係に不可避的に区分される」(27頁)とされている。

つまり、政治的には、植民地獲得という支配・隷属関係の拡大という姿で現れるが、その根底には、資本すなわち物質信仰が前提になっているのである。これは、すべての価値の基準が物質的な量の大きさへと集約されようとしていることを意味する。

われわれは、すでにその結果を知っている。二度にわたる世界大戦の結果、領土獲得戦

争は終結したが、その後、経済活動を通じて、先進国と言われる国々は同じような物質獲得戦争を繰り返している。20世紀から21世紀へと移行しつつあるこの時代、やみくもな物質獲得戦争が地球という限られた環境を破壊しつつあることに、ようやく気づき始めたばかりなのである。

さて、このようにしがみついている物質の根拠は感覚的な経験である。感覚的に確認できるものを物質と呼ぶのである。それが、思いのほか信じられないものだということはずでに述べた。

この記事を書いた記者の目に映っていたのはこのような状況だった。そして、記者にとってみれば、19世紀末にますます加速する物質偏重主義が、危険に思えたのである。

では、記者は、少女にどのような世界が本当のものだと伝えたいのだろうか。

## 2 サンタクロースという存在

記者が伝えるのは、サンタクロースを通じてである。そこでサンタクロースはどのように述べられているのだろうか。

記者は「この世の中に、愛や、人へのおもいやりや、まごころがあるのとおなじように、サンタクロースもたしかにいます。」と述べる。また、「サンタクロースがいなかったら、この世の中は、どんなにくらく、さびしいことでしょう！」と述べ、「サンタクロースがいなければ、人生のくるしみをやわらげてくれる、子どもらしい信頼も、詩も、ロマンスも、なくなってしまうでしょうし、わたしたち人間のあじわうよろこびは、ただ目にみえるもの、手でさわるもの、かんじるものだけになってしまうでしょう。」と、サンタクロースの存在を認める場合と認めない場合との比較を行っているが、これらの記述から、サンタクロースをいかなる存在と考えているのかが分かる。

まず、最後の点から、サンタクロースは、目に見えたり、手で触ったり、感じたりするものではないということ、つまり二十世紀の考え方を支配したような、実在を物質的な実在と規定するものではないということである。これは先の、うたぐりや根性に対する批判とも一致するし、当時の時代風潮に対する危惧とも合致する。

そして、サンタクロースは愛や思いやりやまごころなどと同じようなものだということである。では、愛や思いやりやまごころとは、いかなる存在なのだろうか。

それを考えるためには、存在論的な立場を、すなわちそもそもある事柄の存在をどのように考えればよいのかを確認しておかなければならない。

いうまでもなくこれは哲学の歴史を貫く大問題であるが、ここでは、筆者なりに考えていることを図式的に述べるにとどめる。

記者によれば、愛や思いやりやまごころが存在しないと述べる立場は、物質的なものだけが存在しているという立場だとするが、愛や思いやりやまごころと、物質とは、いずれも心で捉えた事柄、すなわち意識に生じた事柄だという点では共通である。このような意識に生じた事柄を現象と呼ぶ。

構造的に考えれば、われわれの認識はこのような現象を離れることはできないし、われわれがいかにも、確乎たる存在、だとか、客観的な実在などと呼んだとしても、それはあくまで意識上のことでしかない。ということは、すべてがあやふやな思いこみでしかないと言わなければならないのだろうか。

実はそうではない。

われわれが確かな存在、と呼ぶときには、われわれはそこに何かの基準を設け、その基準に照合するものを確かな存在と呼んでいる。たとえば、物質を確乎たる存在とする場合

にはその基準は、感覚すなわち感覚的な頻度や感覚的な実在感だといえる。

では、そのような感覚的な基準がどのようにして成立したのかといえば、それは、もともと備わっているとか、神様が下さったといった説明をすることになる。そのいずれの説明も正しい。なぜなら、それぞれの説明自体、説明できないものを説明するための、その人にとって最もふさわしい仕方を選んだことになるからである。

では、そのような説明を構造的にいえばどのように述べられることになるだろうか。

もはや、唯一絶対的な存在全体の構成によって前提がつけられ、それによって、ある確乎たる実在を決定している、といわざるをえない。

存在全体、とは決して物質的な世界だけを指すわけではない。いわば、物質や精神やその他もろもろの、われわれが言葉にすることができるすべての対象によって成立している全体である。言葉にすることができる、というのだから、「唯一絶対の存在そのもの」とひっくるめていうことも可能である。古来、哲学は、この存在そのもののあり方を問題にしてきたが、筆者はここで述べつつあるような、構成する運動をはらんだ唯一絶対的な全体を考えている。

さて、このような存在全体のひとつの側面が物質であるとするならば、愛や思いやりやまごころは、どのような前提によって支えられているといえるのだろうか。

それにすぐに答えるのは困難な気もするが、記者はそれを婉曲的に述べている。それらが毎日の生活を、「うつくしく、たのしくしている」というのである。原文には、この両者に「最高の(highest)」が付けられているように、この美しく楽しいのは、目先の娯楽や刹那的な喜びなどではない。最も深く、最高の喜びや楽しみこそが、愛や思いやりやまごころを構成する前提の原点である。

そして、記者によれば、サンタクロースもまた、そのような前提によって成立しているもののひとつだとされる。

記者の以下のような記述もまた、存在に関する筆者の考察を参考にすることができる。

「サンタクロースが信じられないというのは、妖精が信じられないのとおなじ」

「サンタクロースをみた人は、いません。けれども、それは、サンタクロースがいないというしょうめいにはならない」

これらは、先に、物質だけが真に存在するものではない、と述べたことに相当する。

「この世界でいちばんたしかなこと、それは、子どもの目にも、おとなの目にも、みえないものなのです」「この世の中にあるみえないもの、みることができないものが、なにからなにまで、人があたまのなかでつくりだし、そうぞうしたものだなどということは、けっしてない」

これらは、真に存在するものとは、存在全体の構成によって前提がつけられ、それによって確乎たる実在を決定しているのだから、その真の全体の構成を、われわれ有限な人間は認識することはできない、ということ述べている。

さらに、この記者は、われわれの認識の限界を強く述べて、その解答へと踏み込む。

「目にみえない世界をおおいかくしているまは、どんな力のつよい人にも、いいえ、世界じゅうの力もちがよってたかっても、ひきさくことはできません」

「ただ、信頼と想像力と詩と愛とロマンスだけが、そのカーテンをいっときひきのけて、まくのむこうの、たとえようもなくうつくしく、かがやかしいものを、みせてくれる」

前者の引用は、認識の限界を強調しているが、後者は、認識の可能性を述べているといえる。その可能性は、どのようなものだといわれているのだろうか。

信頼(faith)、想像力(fancy)、詩(poetry)、愛(love)、ロマンス(romance)、はいずれも、物質のような意味での確実な認識対象ではない。つまり、手でふれたり、目で見たりできるようなものではない。感覚的には不確かなものである。また他方では、論

理的に説明できるものでもなく、分析して確認できるものでもない。それらはいずれも何かをまとまりとして象徴しているものである。認識するとしたら直観するしかないものである。

このようにあいまいなものを確かな存在だというのには、なにを根拠にすればよいのだろうか。

哲学的な表現を使えば、それは共同主観の事実にゆだねるということである。そのひとつの方法は、歴史をたどることである。歴史の中で、サンタクロースがどのように捉えられてきたのか。それが、確乎たる存在だと認める方向性を持っているのなら、たしかにサンタクロースは、存在するといえる。もうひとつの方法は、現に大勢のひとがサンタクロースの存在を認めているかということである。以下、それらについて考える。

### 3 サンタクロースの歴史と意味

まず、歴史をたどれば、サンタクロースは聖ニコラス（セント・ニコラウス）伝説が変形してできあがった偶像であるとされる。『広辞苑』によれば、「（四世紀頃の小アジア、ミュラの司教セント・ニコラウス[オランダ語方言Sante Claus]の転訛語）クリスマスの前夜、子供たちに贈物を配って行くという赤外套・白いひげの老人。この話はもとアメリカに移住したオランダ人の新教徒によって伝わり、クリスマスに贈物をする習慣と結合し、今では世界各国に広まった」（新村出編『広辞苑』[第四版]岩波書店、1955/1998、1075頁）とある。この常識的な規定が重要な意味を示していることをのちに述べるが、ここに記されたいいくつかの事柄について、少し詳しいテキストで確認しておく。

コレット・メシャン著、樋口淳・諸岡保江編訳『サンタクロース伝説の誕生』（原書房、1991）によれば、聖ニコラスは「ギリシャのパトラスで二七〇年ごろ生まれ、後にミュラの司教として慈善活動を行なった」（20頁）という点だけは、伝説の中で一致しているとされる。

同書では、聖ニコラスを民間信仰の一形態と捉え、伝説や伝承を辿ることによって聖ニコラスの現代に至る意味を探ろうとする試みがおこなわれている。その伝説は、他の聖人の伝説と同様、無実の罪人を救ったり、貧しい人に施しをしたり、飢饉から人々を救ったり、船を遭難から救ったり、死んだ子供を復活させたりなど、多様な奇跡を伝えている。そして、その根底にあるのは、聖ニコラスが、ギリシャの伝統的な信仰、特にアポロン信仰に対して戦い、キリスト教の布教に尽くしたという宗教史における改革者だという理解である。従って、ヨーロッパにおける聖ニコラス信仰の広まりは、11世紀末から13世紀にわたって行われた十字軍の遠征（30～32頁）や、それ以降盛んになった交易や聖地巡礼によって（35～36頁）拍車がかげられたとされる。

さらに、同書は、聖ニコラスの祭りでは古く、聖ニコラスの仮面をつけたものを先頭にして、異形の仮面、それも人食いや妖怪のような恐ろしいものがお供に付いて子供たちにプレゼントを渡して歩くという風習があったことや、それが今では、祭り当日の12月6日の前夜に、子供たちにプレゼントを贈る風習があることに触れ、ヨーロッパ各地における聖ニコラスの祭りや、その他の冬の祭りが、豚を生け贄にする祭りや、結婚相手を探す行事のような、やがて来る春に向けて、いわばエネルギーを蓄える意味を持っているとしている。

このことは子どもたちへのプレゼントが食物だということからも言える。また、贈り物は暖炉の中の靴に入れられるのだが、それについては、ヨーロッパ各地において結婚の儀式に重要な役割を果たすのが靴だということと関連があるとされている（100～101頁）。

このように聖ニコラスの祭りは、農村で仕事が無く、それゆえに春から活動するためのエネルギーを蓄える冬の祭りの典型としていまも伝承されている。

同書の編訳者樋口淳の解説によると、「サンタクロース」はこの聖ニコラスのオランダ語「シントクラース Sinterklaas」がなまったものだとされる。そしてこのシントクラースは、首都アムステルダム守護聖人で12月6日がその祝日であり、長期間にわたって大々的なお祭りが行われるという(228~229頁)。そして、16世紀に、オランダ人たちがアメリカに渡りニューアムステルダム(現在のニューヨーク)にたどり着いた際に、シントクラースの祭りは、一般的なプロテスタントの祭日であるクリスマスの行事に姿を代えて定着したのではないかとされている(243~244頁)。

同書の研究は、サンタクロースの起源に対するひとつの、しかし、有力な解答である。そして、この歴史が伝えるサンタクロースの本質的意味は、未来を担う若者や子どもに豊かな将来を期待し、その保証として結婚や食物やプレゼントを贈る存在だといえる。その意味において、サンタクロースは当然、大人としての社会全体の象徴でもある。さらにその背景に、先の時代の宗教に対してキリスト教の布教に尽くした聖ニコラスの様々な愛と救済の伝説があったといえるし、その愛と救済こそが大人としての社会の在りようなのだとするのが、キリスト教社会の行き方でもある。

なお、葛野浩昭『サンタクロースの大旅行』(岩波新書、1998)では、聖ニコラス信仰にはじまるサンタクロースの歴史に触れられたうえで、聖ニコラス信仰が直接サンタクロース信仰に結び付いたかどうかはわからないとされるが、ニューアムステルダムにおけるオランダ人の祭りが、今日のサンタクロースの起源だということについては、認められている(P. 26)。

#### 4 現代におけるサンタクロースの本質的意味

歴史が伝えるサンタクロースの本質的意味は、愛と救済というキリスト教の本質的性格を背景にして、豊かな未来を担う若者や子どもに、将来への保証として、結婚や食物やプレゼントを贈る大人の姿だということであったが、では、それが現実の社会ではどのような現象として現れているのだろうか。

我々はサンタクロースを存在しているとして振る舞っているのだろうか。たしかに、もし、サンタクロースを物質的実在として期待するのなら、それは存在しているとはいいたい。しかし、先に述べたように、物質的実在は実在のたった一つの側面、たったひとつの規定でしかない。

では、我々はサンタクロースを物質とは違った意味で、実在として捉えているのだろうか。現代社会は、サンタクロースを商売の道具くらいにしか思っていないのではないか。

筆者はここでひとつの視点を想定する。それは、宇宙のどこかから地球のすべての家庭をのぞき込むことができる視点である。

その視点で、12月24日の深夜、幼い子どもがいる家庭を、夜10時すぎに覗いてみると不思議なことが起こる。地球の自転に合わせて夜10時という地点も帯状になり、少しずつ動いているのだが、その夜10時過ぎという帯の中で子どもが眠ったのを見計らって、膨大な数の親が、親がいない子には親に代わるべき人が、どこからかいそいとプレゼントを取り出して子どもの枕元に置き、それから、そのすべての人々はなぜかにつこり笑って、眠る子どもの頭を撫でるのである。膨大な数のこのような不思議な行為は、まるで伝染していくように地球の上をぐるりと回り、地球すべてが12月25日になるまで続くのである。

それこそが、サンタクロースそのものである。物質ではなく、精神とも言えず、しかし、

その行為はまぎれもなくサンタクロースそのものである。しかも、地球上の膨大な人が、なんの迷いもなく、それを演じるのである。この視点に映るその姿はいうまでもなく、共同主観を意味しており、その共同主観に支えられたこの例は、たしかな実在の証拠である。

考えてみれば、我々はしばしばこんなサンタクロースを演じている。それは必ずしも12月24日の夜ではないかもしれない。贈る相手も子どもではなく、伴侶や恋人や親や、ただの友だちやペットかもしれない。けれども、贈るそのとき、我々はサンタクロースになっている。そこには、まぎれもなくサンタクロースが存在する。

そして、このサンタクロースの本質的意味も、歴史から導かれた意味と一致する。愛と救済という大きな心をもって、相手の豊かな未来を祈る気持ちをこめてプレゼントを贈るような存在というのが、その意味である。そして、この気持ちは、若者や子どもに大人から無償で贈ることに起源があるように、大人の大きな心に生まれるものである。

キリスト教会におけるクリスマスの説教では、イエス生誕と神の愛との関係について、「神はその子イエスをわれわれに贈ってくださったほどに、われわれを愛して下さっている。」という表現がしばしば用いられる。贈り物と、最も完全な大人としての神とのこの結び付きは、小論の論旨からも納得できるものである。

『サンタクロースっているんでしょうか？ -子どもの質問にこたえて-』は、「うれしいことに、サンタクロースはちゃんといます。それどころか、いつまでもしなないでしょう。」

「一千年のちまでも、百万年のちまでも、サンタクロースは、子どもたちの心を、いまとかわらず、よろこばせてくれることでしょう。」

と、結ばれている。この記者もやはりサンタクロースなのである。

## 5 親としてのサンタクロース

このように述べられるサンタクロースは、人の心理の総体のうち、どのような側面を強調するものだろうか。ここでは、それを確認する手がかりとして交流分析(TA)の目安を用いる。ところで、交流分析の概説については筆者はすでに拙論「『歎異抄』における『親』 -比較論的考察-」(九州大学哲学会紀要『哲学論文集 第35輯』平成11年)で述べているので、紙数の限られた小論ではその箇所を利用してさらに必要な内容に限定して述べる。

交流分析は、本来は、アメリカのエリック・バーンが創始した「TA (Transactional analysis)」に基づく自己コントロールの方法である。アメリカではすでに1960年代から広がりを見せているが、わが国では1970年代に入って本格的に紹介され、今日に至るまで発展を遂げている。

そこで用いられる心理的状态に対する理解の目安は、人の自我状態を大きく三つの要素に分けて理解し、そのうち二つをさらに二つずつに分けて、合計五つの要素に分けて理解するものである。

桂載作・杉田峰康・白井幸子『交流分析入門』(チーム医療、昭和59年/平成6年)によれば(8-15頁)、その三つの要素とは、第一に「親(P=Parent)」であり、第二に「大人(A=Adult)」であり、第三に「子ども(C=Child)」である。そして、「親」と「子ども」は、後述するようにそれぞれ二つずつに分けられる。これら五つの要素がすべて調和して備えられる時、円満で成熟した人格が獲得されることになる。

「親(P)」の要素は、「批判的な親(CP=Critical Parent)」と「保護的な親(NP=



Nurturing Parent)」とに分けて考えられる。

「批判的な親(CP)」は、「自分の価値観や考え方を正しいものとし、それを譲ろうとしない部分」であり、「良心や理想と深く関係し」、「子どもたちが生活するうえで必要な、さまざまな規則など」を教えるが、「同時に批判や非難を」行なうとされる。また、これが強過ぎると、「尊大で支配的な態度、命令的な口調、褒めるよりも責める傾向」が顕著になるとされる。

「保護的な親(NP)」は、「親切、思いやり、寛容な態度を示す部分」であり、「子どもや後輩をいたわり、励まし、親身になって面倒をみる」とされ、「罰するよりも許し、褒めるという指導をする」とされる。そして、「人の苦しみをわがことのように感じとろうとする養護的な、やさしい面を備えて」いるとされる。ただし、これが強過ぎると「過保護」になるとされる。

さらに、「批判的な親」は「父親的な厳しさと権威をもつ」とされ、「保護的な親」は「母親的な共感と理解に満ち」とされているが、この両面からの働きかけが「うまく調和」する時にこそ、生き生きとした成長と発展を遂げると述べられている。この「調和」が重要な点である。

次に、「大人(A)」の要素は、「事実に基づいて物ごとを判断しようとする」ものだとされる。「感情に支配されぬ自由な立場」であり、「知性、理性と深く関連」し、「合理性、生産性、適応性」をもち、冷静な計算に基づいて機能するものだとされる。これは、情報収集力と情報を整理、分析、解釈する能力といってもよい。ただしこれが過剰になると「頭でっかち」と言われるような「有言不実行型」や「情熱の乏しい機械人間」にもなりかねないとされる。

さらに、「子ども(C)」の要素は、「実際の子どもとしての、ありのままの姿を保っており、主として感情や衝動から成り立って」いるとされるが、この「子ども」の要素には「自由な子ども(FC=Free Child)」と「順応する子ども(AC=Adapted Child)」とがある。

「自由な子ども(FC)」は、「人格の中で最も生来的な部分」だとされ、「自由で何物にも縛られない自発的な部分」で、「創造性の源」だとされる。また、「自然の感情を素直に現わすことができ」、「一般に明るくて、ユーモアに富んで」いるし、「芸術的な素養や直観力」もあるとされる。しかし、新里里春・水野正憲・桂載作・杉田峰康『交流分析とエゴグラム』(チーム医療、昭和61年/平成5年)によれば、「自由な子ども」が強過ぎると「わがままな面があり、自分かってで依存的な面をもち、他人への配慮に欠けることがある」(27頁)と指摘されている。

「順応する子ども(AC)」は、「自分の本当の気持ちを押し殺して、親や先生の期待に添おうと努めている」要素だとされ、「具体的には、イヤなことをイヤと言えない、簡単に妥協してしまう、自然な感情を現わさない、自発性に欠け他人に依存しやすい」という姿を示し、「ふだんはおとなしく、いわゆる”イイ子”」だが、「何かあると反抗したり、激怒したりする」という面も合わせ持つとされる。また、『交流分析とエゴグラム』によれば、「順応する子ども」が強過ぎると「ストレスを心の中に溜めこむことに」(27頁)なると指摘されている。

これらの「子ども」の要素についても、両面の調和が必要である。

また、池見西次郎・杉田峰康『セルフコントロール - 交流分析の実際 -』(創元社、1974/1996)では、「親」について観察する場合には、「健康な親」「歪んだ親」とに分けることができるとされる。

「健康な親」とは、「a. 良心の意識的な部分無意識的な部分との間に妥協ができていく(融通性)。b. 父性的なもの、母性的なものとのほどよい調和。」との二つの性質

が述べられ、さらに「父性と母性の調和」に関しては、「父親的役割」すなわち「間違ったことに対しては批判、叱責、処罰を行って、きびしく教育する」ことと、「母親的役割」すなわち「賞すべき成果に対して報酬を与え、苦痛を味わっているときには、同情的、保護的な態度で接する」こととの調和であるとされる(23-24頁)。

これに対して「歪んだ親」とは「a. 良心の意識的な部分と無意識的な部分との間の大きな隔たり。b. 父性的なものとの母性的なものとの不調和。」であるとされ、不調和のパターンが列記されている(24-25頁)。

ところで、ここで述べられる「親」とは、あくまで役割としての「親」、すなわち「親性」である。同書にも「子どもを育てるに際して、父母のいずれが、どの役割を演ずるかには必ずしも関係なく、父性的なものとの母性的なものとの調和が大切になる」(25頁)と述べられている。

以上のように、交流分析では、小論の考察に有力な手がかりを与えてくれる。そこで、この目安にあわせて先のサンタクロースの本質的意味、すなわち、愛と救済という大人の心をもって、相手の豊かな未来を祈る気持ちをこめて贈り物をする心が、総体としての成熟した心理のどの側面を示しているのかを確かめなければならない。

それはまず、「保護的な親(NP)」である。これは、「親切、思いやり、寛容な態度を示す部分」であり、「子どもや後輩をいたわり、励まし、親身になって面倒をみる」とされ、「罰するよりも許し、褒めるという指導をする」とされ、「人の苦しみをわがことのように感じとろうとする養護的な、やさしい面を備えて」いるとされた。そして、これが強過ぎると「過保護」になるともされた。

サンタクロースの本質的意味が、このような「保護的な親」だということはいまでもない。クリスマスの贈り物は、基本的には秘密裏に行われる。これは見返りを要求しない無償のものだということを示している。そして、サンタクロースの歴史を振り返って見ても、その歴史の方向性には、無償で相手をいたわり、相手にふさわしいものを贈るという心が示されている。その相手は、子供が親に贈り物をする場合のように、現実には自分より目上のものの場合もありえようが、贈るその時の気持ちはみんなこの「保護的な親」になっているといえる。

ところでその際、「過保護」になる可能性も考えられる。その可能性に対して警鐘を鳴らし、相手にとって真に意味ある贈り物にするように働くのが、「批判的な親(CP)」である。「批判的な親」は、「自分の価値観や考え方を正しいものとし、それを譲ろうとしない部分」であり、「良心や理想と深く関係し」、「子どもたちが生活するうえで必要な、さまざまな規則など」を教えるが、「同時に批判や非難を」行なうとされた。また、これが強過ぎると、「尊大で支配的な態度、命令的な口調、褒めるよりも責める傾向」が顕著になるとされた。本当に必要な贈り物を「尊大で支配的」ではないように贈るためには「自分の価値観や考え方が本当に正しいものであるのかを常に厳格に確かめつつ考慮しなければならない。そして、先の「保護的な親」との調和こそがなによりも必要なことである。

そして、「批判的な親」「保護的な親」が真に調和するためには、「親」や「子ども」の要素も調和的に持たなければならないのは明らかである。そして、それらすべてを身につけたにふさわしい姿を考える時、そのひとつがサンタクロースの姿である。すなわち、サンタクロースが穏和な老人の姿として伝承され、時にユーモラスな姿や性質を与えられているのは、この親としての調和を映像的に示しているといえよう。まさにそれゆえに、サンタクロースは「いつまでも死なない」のである。

## 引用文献

- ・中村妙子訳『サンタクロースっているんでしょうか？ -子どもの質問にこたえて-』偕成社、1977/1986.
- ・村上ゆみ子著『サンタの友だちバージニア -「サンタはいるの？」と新聞社に投書した少女-』偕成社、1994.
- ・柴田三千雄・木谷勤『世界現代史』山川出版社、1985/1995.
- ・新村出編『広辞苑』[第四版]岩波書店、1955/1998.
- ・コレット・メシヤン著、樋口淳・諸岡保江編訳『サンタクロース伝説の誕生』原書房、1991.
- ・葛野浩昭『サンタクロースの大旅行』岩波新書、1998.
- ・荒木正見「『歎異抄』における『親』 -比較論的考察-」九州大学哲学会紀要『哲学論文集 第35輯』平成11年.
- ・桂載作・杉田峰康・白井幸子『交流分析入門』チーム医療、昭和59年/平成6年.
- ・新里里春・水野正憲・桂載作・杉田峰康『交流分析とエゴグラム』チーム医療、昭和61年/平成5年.
- ・池見酉次郎・杉田峰康『セルフコントロール -交流分析の実際-』創元社、1974/1996.

[Comparative Thought of Parenthood on Santa Claus]  
(Masami Araki・福岡女学院大学人文学部教授)